

令和3年度-令和4年度「生物多様性基礎調査」報告書<普及版>

能勢町の自然の「個性」がわかる

能勢の自然の 見つけかた & 見わけかたガイド

能勢の里山活力創造推進協議会





大切な能勢の自然と生きもの

- 知って・学んで・見つけて・守って・増やしていこう -

能勢町は、豊かな自然に恵まれた、大阪府内でもとても生物多様性が高い地域です。この冊子では、ぜひ覚えてほしい「能勢町でふつうに出会える生きもの」を紹介しています。探しやすい場所、よく似たなかまとの見分けかたのポイントもあります。さて、あなたはいくつ見つけられるでしょうか？ 形や名前が分かると、その生きものの方がもっと好きになるでしょう。気になったら、名前をキーワードにして本やインターネットでいろいろなことを調べてください。冊子の中では、能勢町内の生きものを守る・増やす取り組みの紹介、問題になっている外来生物なども紹介しています。いま「ふつう」に見られる生きものはそのままに、少ない生きものは絶滅させず「ふつう」に戻していけるように、この冊子をきっかけに能勢の自然の個性を知り、大切にすることが増えることを願います。



能勢の里山活力創造推進協議会

能勢町の大切にしたい生きもの (能勢町版レッドリスト)

絶滅のおそれのある生きものを選定したリストは、通称「レッドリスト」と呼ばれ、世界や各国、各都道府県などの範囲でも作られています。能勢町では、生物多様性を守る取り組みを進めるため、2021～2022年にかけて「能勢町の大切にしたい生きもの」を調べ、植物・昆虫・動物など12分野376種を選定しました。町のホームページで調査の概要を公開しています。

お問合せ: 能勢町産業建設部地域振興課 電話072-734-3976



詳しくは町のHPへ /



◀ハンミョウ

体長2cmほどのきれいな虫。別名、道教魚。近付くと飛び立ち、少し先で止まる様子から。



◀フシグロセンノウ【Bランク】

夏から秋に朱色の花を咲かせるナデシコ科の野草。

令和3年度-令和4年度

「生物多様性基礎調査」報告書<普及版>

『能勢の自然の見つけかた&見わけかたガイド』

■発行: 能勢の里山活力創造推進協議会

■制作: 認定特定非営利活動法人大阪自然史センター

■監修: 能勢町生物多様性基礎調査プロジェクトチーム

■写真提供ほか

前田 満、小西 功泰(水生昆虫保全)、菅原 玲子(アルファルフア)、高田 みちよ(アオバズク)、森 慶典(リス)、松本 史樹郎(キバネツノトンボ)、藤田 俊兒(オオサンショウウオ)、和田 岳(シカとノウサギのふん)、米澤 里美、(ノウサギ)、道盛 正樹、丸山 健一郎

■イラスト提供

橘高 加奈子、西澤 真樹子、山中 亜希子、米澤 里美

大切にしたい！
能勢町の
生きもの

「大切にしたい生きもの」に選ばれた主な種類を紹介します



▲**テングコウモリ**【Aランク】
樹洞や洞窟にすむ小型のコウモリ。
鼻先の突き出した形が特徴



▲**クサレダマ**【絶滅】
かつて能勢の寒天干場で見られた
クサレダマやオグラセンノウは絶滅
してしまったと考えられる



▲**ナゴヤダルマガエル**【Aランク】
トノサマガエルに似ているが、全体に
丸みがあって四肢が短め。冬でも水のある
湿田環境が好み



▲**シロマダラ**【Cランク】
ベージュ色に黒いまだら模様のへ
び。夜行性で人目に付きにくい



▲**キバネツノトンボ**【絶滅】
黄色と黒の模様で、触角が長い草地の虫



▲**ヤマタカマイマイ**【Bランク】
山地や林縁にすむカタツムリの1
種。殻は背が高くて3cmくらいに
なる

ナマズ
【Cランク】▶
川や池や田んぼ
にすむ肉食性の
魚。長いヒゲが4
本ある



▲**ウスキブナノミタケ**
【Cランク】
秋にブナの実から生え
る小さなきのこ



▲**アオキ**【Bランク】
林床に普通の常緑低木だったが、シ
カの食害で激減している



▲**キリシマゴケ**【Aランク】
山地の湿度の高い岩上や樹
幹に着生し、セン類と間違
えられるタイ類。北半球の
温帯に広く分布するが、大
阪府下では唯一の産地



▲**クモノスシダ**【Bランク】
和名の由来は、くもの巣を
張ったように葉を伸ばすこ
とから。石灰岩質を好み、
岩のすきまに生え、府下で
は稀な小型のシダ植物

ツリフネソウ▶
【Bランク】
湿った場所や川辺に
普通に見られた野草
だが、シカの食害で激
減している





大阪府の北端・能勢の自然の特徴

丹波山地の南端に位置する能勢町は、町内全体が標高200m以上にあり、四方を深山(791m)、剣尾山(784m)、妙見山(660m)、三草山(564m)、歌垣山(554m)などのゆるやかな山々に囲まれ、山辺川、一庫大路次川、野間川、田尻川の流れが田畑をうるおします。年間降水量は約1,400mm、年平均気温も13.5℃と大阪市内と比べて5℃程低くなっています。町の面積の78.7%を森林が占め、うち64%がクヌギやコナラを中心とした雑木林です。大都市近郊ながら希少な生きものが数多く生息しており、三草山(ゼフィルスの森)と地黄湿地は大阪府緑地環境保全地域に指定され、野生動植物の保全が行われています。また、妙見山のブナ林は大阪府自然環境保全地域に指定されています。

生きもの暦 はる

3月：カンサイタンポポ、フキ、スミレなどの花がさく・キタキチョウ、モンシロチョウなどが飛びはじめる・ウグイスがさえずりだす、ツバメがやっまくる

4月：ショウジョウバカマ、ニリンソウ、サクラ・イチゴ類、コアシ、キアサなど多くの草木の花がさく・棚田に水が入りだす・アマガエル、トノサマガエル、カナヘビ、アオダイショウなどが動き出す・小鳥のさえずりシーズンに

5月：ウマノアシガタ、クリンソウ、テンナンショウ類、ツツジ類、タニウツギ、エゴノキなどの花がさく・雑木林の新緑が気持ちいい・ハルゼミが鳴く・フクロウのヒナの巣立ち、アオバズクがやっまくる・田植えがはじまる・ため池などにヒキガエルのオタマジャクシが見られる



生きもの暦 なつ

6月：ドクダミ、ミヤコグサ、クリ、ヤマボウシ、ジャケツイバラ、ウツギ、ネズキ、コアジサイなどの花がさく・新緑から深緑へ・モリアオガエルが泡の卵をうむ・アカシヨウビンの声が聞こえる・ホタルがとぶ・ニイニイゼミが鳴きだす

7月：マアカンゾウ、ユウスゲ、ネジバナ、ネムノキなどの花がさく・アオバズクのヒナの巣立ち・雑木林では、カアトムシやクワガタ、スズメバチも見られる・アアラゼミ、クマゼミ、ヒグラシなども鳴きだす

8月：サギソウ、ヌマトラノオ、キガンピ、ノリウツギなどの花がさく・トノサマバッタやショウリョウバッタの成虫が見られるようになる



生きもの暦 あき

9月：オミナエシ、ヒヨドリバナ、ヌスビトハギ、ガガイモ、ツルボ、センニンソウ、ゲンノショウコ、チカラシバ、ヤマジノホトトギス、ヒガンバナ、ススキ、オギなどの花がさく・クリのしゅうかく・コロロギ類など、鳴く虫のシーズン

10月：いもかり・赤トンボ類が色づく・アカネ、サクラタデ、アキノキリンソウ、ノコンギク、ヤクシソウ、リンドウ、アケボノソウ、ヤマラッキョウ、ワレモコウなどがさく

11月：紅葉のシーズン・雑木林では、赤や黒い木の実が目立つ



生きもの暦 ふゆ

12月：冬の野鳥のかんさつシーズン・水ではカモ類などの水鳥が、林ではシジュウカラ、ヤマガラ、エナガ、コガラ、メジロなどがいっしょに行動するようすも見られる

1月：気温はマイナス10度になることもある・雪がつもったら、ノウサギやキツネなどけもの足あとを探してみよう

2月：寒い朝には、長くのびたしもばしらがみられる・フクジュソウなど早春の花がさきだす



おおさか
大阪では
4カ所しかない
ブナ林の一つ

お寺が守ってきた 妙見山のブナ林

近畿地方では標高800m以上の場所に生えることが多いブナ。大阪には高い山がなくブナ林はほとんど見られません。妙見山は高さが660mと低い山ですが、お寺の森として大切に保護されてきたおかげで、貴重なブナの林が残っています。



妙見山のブナ大木 2022.6.24

はたら
働き者の
人々が
作り出す環境

山すそにひろがる よく手入れされた草地

人の暮らす場所と山が、なだらかにつながっているのが能勢の景色の特徴です。よく手入れされた山すその明るい草地は、キツネやキキョウなど草原を好む生きものすみかになります。



キツネのすむ草地 山辺2022.4.18

ちょっと
木かげが
生きものに
うれしい

クリ林の明るい林床

クリや果樹の栽培や、薪や炭にするクヌギの生産に利用されてきたことで、「少し木かげのできる草原」の環境が維持され、こうした環境を好む動植物が生きています。クリ林はさまざまな植物や昆虫の生息場所を守る、能勢の自然のシンボルです。



夏のクリ林 吉野2018.6.17



田んぼ、小川、水路 水辺の生き物たちのゆりかご

水をたっぷりたたえた田んぼや小さな水路は、タニシやカワナ、水生昆虫、イモリ、カエル、ヘビなどが暮らす大切なすみかです。鳥やけもの狩場にもなり、多くの生きものを育みます。

たなだ
長谷の棚田は
つなぐ棚田遺産に
選ばれています



棚田の景色 長谷2022.3.31

大きな樹には、ほかの生きものも集まります



アオバズク

昔から大切にされてきた大木

天然記念物に指定されている野間の大ケヤキ、八坂神社のスタジイ、倉垣天満宮のイチヨウ、天王などの神社に残るアカガシなどがあります。



ケヤキの巨樹 野間2022.6.24

いつでもうるおっている貴重な場所



湿地に生えるモウセンゴケ 中堂2022.4.18

町内あちこちにある湿地 府内唯一の滲水湿地も

雨が地下を伝い、山すそでしみ出して湿地ができます。水はけの良い花崗岩の山である能勢町には小さな湿地がたくさんあり、湿地を好む動植物がいます。町の東部にある地黄湿地が府内唯一の滲水湿地として有名です。大阪みどりのトラスト協会が、環境保全事業をおこなっています。

剣尾山に残る 岩尾根の植物と周辺の生きもの

急な斜面に大きな岩がごろごろした乾いた環境。アカマツやヒメコマツ、モミなどの針葉樹、ホオノキやヤマヤマヤシャブシ、ヤマボウシ、ホツツジなどの広葉樹が生えます。タカなどの大きな鳥の巣もあります。最近ではシカの影響で植物や昆虫などが減り心配されています。



剣尾山頂付近から 2022.11.7

剣尾山の上からは町が一望できます

大阪に流れる
たくさんの川の
てっぺん



河川環境

能勢町の河川は、多くが猪名川水系の最上流部にあたります。良好な河川環境が保全されているエリアは、水辺の生きものの繁殖場所としても重要です。



溪流の様子 宿野2021.6.11

どっちがどっち？
能勢の植物

スギとヒノキ

植林の代表、スギとヒノキ。どちらも常緑の針葉樹ですが、葉や実の形はかなり違ってきます。



スギ

ヒノキ

アカマツとヒメコマツ



アカマツ

アカマツは2枚の葉がセット（二葉松）。ヒメコマツはゴヨウマツ（五葉松）とも呼ばれ、5枚の葉がセットになって枝に付いています。



ヒメコマツ

ケヤキとエノキとクワ



ケヤキ



エノキ



クワ

ケヤキは葉のふち全体がギザギザ。エノキは、葉の上半分くらいにだけギザギザがあります。クワの葉はギザギザの先が長くとがります。

ススキとオギ



実の毛は短い

実の先にノギがある

ススキの穂



実の毛は長い

オギの穂

穂をよく見ると小さな花や実がたくさん付いています。花や実の芒（ノギ）の有無で区別できます。

キツネノカミソリとヒガンバナ



キツネノカミソリ



ヒガンバナ

キツネノカミソリは8月頃に、ヒガンバナは9月の彼岸の頃に咲きだす花です。ヒガンバナの雄しべは花から長く伸びます。どちらも花の時期には葉が見られません。

見わけて
みよう！
昆虫・クモ

ホタル

ホタルの幼虫は、川のカワニナ（ゲンジボタル）、田んぼでモノアラガイ（ヘイケボタル）を、林床のオカショウジガイなど（ヒメボタル）を食べて育ちます。メスが飛べないヒメボタルのいる場所は、昔から豊かな自然環境が残る場所といえます。



オシオカラトンボとシオカラトンボ



しおから
塩辛は、オスの体の白い所が塩をまぶしたように見えるから。白い粉は紫外線を反射する。シオカラは眼が緑色で、メスは黄色っぽい麦わら色。オオシオカラはオスの体が濃青色。

キアゲハとアゲハ



アゲハチョウの幼虫はミカンなどの葉を食べ、キアゲハの幼虫はセリなどの葉を食べて育ちます。

ツチイナゴとトノサマバッタ



おおがた
大型のバッタ類。ツチイナゴはトノサマバッタに似ていますが、眼の下に黒い筋模様があり成虫で越冬します。

冬越しのチョウ



木の葉裏や、木の枝に枯れ葉などが溜まった「落ち葉溜まり」などでじっと春が来るのを待っています。

野山で見かける大きめのアリ



ムネアカオオアリは胸部が赤っぽく目立ち、トゲアリは胸部の背にフック状のトゲが生える特徴的な姿をしています。他のアリの巣を乗っ取ることが知られています。

ナガコガネグモとジョロウグモ



ナガコガネグモは、初夏から秋に草地で見られるクモ。紫外線を反射する白い帯状模様がある円網をはり、獲物を捕ります。ジョロウグモは人里にも多く、秋口から晩秋に大きな巣が目立ちます。

みどり色のカエル

見わけて
みよう！
カエルとイモリ



モリアオガエル



シュレーゲルアオガエル



ニホンアマガエル

野山で出会う緑色のカエルたち。アマガエルとモリアオガエルは木の上によくいます。瞳のまわりはシュレーゲルアオガエルが黄色っぽくモリアオガエルはやや赤みがあります。

田んぼのカエル



ヌマガエル



トノサマガエル

田んぼのまわりで出会うカエルたち。目が大きく背中の緑のしまが目立つトノサマガエル、ヌマガエルは土色の背中と真っ白なお腹が特徴です。

山の茶色いカエル



ツチガエル



タゴガエル



カジカガエル



ヒキガエル

山で出会うカエルたち。溪流でフィフィフィと鳴くカジカガエル、土色のツチガエル、落ち葉色のタゴガエル。山を歩き回るニホンヒキガエルは、体長15cmくらいまで大きくなります。

アカハライモリとオオサンショウウオ



アカハライモリ

水田や湿地、池や小川の淵などのあまり流れのない水辺に生息します。ひふから強い神経毒を出します。お腹の赤黒の斑点模様は他の動物に毒を持つことを知らせる警戒色になっているようです。



オオサンショウウオ

全長150cmにもなる、世界最大の両生類。河川の上流域に生息します。特別天然記念物に指定されています。

トカゲとカナヘビ



ニホントカゲ

カナヘビより光沢のある体色で、小さいときは青い尻尾に黄色い縞模様があります。



ニホンカナヘビ

光沢のない茶色いトカゲの仲間で、尾が長く体長の半分以上になります。



ニホントカゲ (幼体)

マムシとまちがいやすいへびたち



ニホンマムシ



アオダイショウ (幼体)



ヤマカガシ

マムシは太短い体に「丸描いてちょん」模様が特徴。アオダイショウの子には横縞模様があり、時々マムシと間違えられます。ヤマカガシはカエルが好物。水田や池まわりで見かけます。

見わけて
みよう！
鳥とほにゆう類

ツバメのなかま



ツバメ（巣とヒナ）



イワツバメ



コシアカツバメ レッドリストではCランク

ツバメの仲間3種類。巣の形も違います。腰のあたりが白いのがイワツバメ、腰が赤茶色でツバメよりやや大きいのはコシアカツバメ。能勢町では役場や学校の外壁でも営巣しています。

シカ・イノシシ



能勢町で昔から食べられてきたイノシシ。ニホンジカはオスにツノがあります。町内にシカはおよそ3000-4000頭いるといわれ、山の小さな植物を根こそぎ食べて大きな問題になっています。

ドバト・キジバト



ドバト



キジバト

カワラバトが野生化したのがドバト。鼻のこぶは白く、体の色や模様は個体差がかなりあります。

在来のキジバトは、首に青と薄い水色の縞模様があり、羽にはうろこ状の模様がはっきりあります。

ノウサギとシカのふん



ノウサギ



シカ

明るい草地や林に落ちている卵ボーロくらいのふんはノウサギ。シカのふんはドングリ型でやや長めです。

ニホンリス+食べあと



ニホンリス



＼エビフライに似てる！＼

マツの木の下を探すと、リスが食べた松ぼっくりが落ちているかも。

見わけてみよう！
カタツムリとカニ



クチベニマイマイ



オオケマイマイ



サワガニ



モクスガニ

殻に赤茶色の線模様が目立つクチベニマイマイ。平べったい殻の縁に毛が生えたオオケマイマイ。剣尾山ではヤマタカマイマイ（3Pに写真）の殻も見つかっています。

一生を淡水域で過ごす、甲らの幅2~3cmの小さなカニで、日本の固有種。水のきれいな溪流や小川で見られます。

川にすむ大型のカニ。甲らの幅は7~8cmになる。ハサミに毛が生え、ミトンクラブ（手袋ガニ）の英名も。藻類の他、貝、ミミズ、魚、昆虫も食べます。

こうすれば
いいんだ!

生きものたちを守る・増やす工夫



地域の住民を巻き込んで、身近な田んぼの畔や水路、ため池などを手入れし、カエルや昆虫の暮らしやすい自然環境を回復させる取り組みもはじまっています。能勢町で行われている6つの活動を紹介します。



シジミチョウと雑木林

三草山では、ナラガシワを主体とする広葉樹林が広がり、ゼフィルス類(ミドリシジミ類)をはじめとするチョウ類が多く生息しています。1992年から「ゼフィルスの森トラスト運動」が始まり、大阪みどりのトラスト協会によるチョウを指標とした森の植生管理が行われています。



ツバメシジミ



ヒロオビミドリシジミ【Aランク】



ヤマトシジミ

うちの田んぼのあぜも、一部は草刈りしないで残すようにしています

ウマノスズクサを残す 土手の草刈り

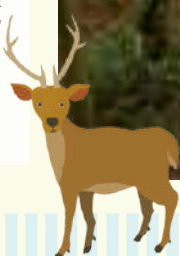


ジャコウアゲハの幼虫はウマノスズクサを食べます。幼虫が育つ時期に、地元の農家さんに頼んで草刈り作業を控えてもらい、このチョウの生息環境を守る取り組みをされている方がいます。最近では、近くのクリ園の方が自主的に春の草刈りを控えてくださるなど、少しずつ活動が広がっているそうです。



シカから未来の森を守る

全国には、林床の低木や草、未来の森を作る若い木の保護等を目的とした防鹿柵を長期間設置して、生物多様性が回復してきた実践例もあります。能勢町でも農地だけでなく、保全すべき環境を設定して、防鹿柵を使った取り組みを進めることが求められています。



シカ柵の外側と内側
(奈良県大台ヶ原での設置例)



上山辺のユウスゲ 1983.8.10

ユウスゲの生える草原を残す

土手に生えるため、^{あび}畔などの管理とともに減ってしまいました。草刈り時期をずらしたり、一部を刈り残すなどで^{ほぜん}保全しています。一般的にユウスゲは、夕方に咲き、翌日の午前中にしぼみます。夕暮れから夜にかけて、スズメガの仲間が蜜を吸いにやってきます。



水生昆虫いっぱいの田んぼは、他の生きものも豊かにくらす場所なんです



水生昆虫にやさしい 一年中水をたたえた水田

地域の人々と協力し身近な自然環境保全を行っている方がいます。田や池の生きものを調べ、水生昆虫を育てて増やしていこうと活動されています。一年中しっかりと湿った環境を守ること、他の動植物の保全も大切なポイントだそうです。



山を手入れする・木を使う

能勢町ではゼロカーボンタウン(二酸化炭素排出量実質ゼロの町)を目標に里山再生事業を進めています。育ちすぎた広葉樹林を若返らせるため、間伐を行い、伐採した木は薪にして販売します。「のせ・木の駅プロジェクト」では山の手入れで出た木材を買取りし、木製品等の原材料として循環させています。



「能勢の山はいいなあ」



今から70年前、小学生には「ストーブ当番」があり、小枝の焚き付けを持って、早めに登校して教室をあたためました。当時は石油やガスもなく、台所もお風呂も柴や薪で、燃えるものはたいてい燃料に使いました。そのため、山には枯れた木はありませんでした。木を枯らす虫も同時に燃やされるので、ナラ枯れを起こす原因の「カシノナガキクイムシ」もいませんでした。

田んぼを耕すのは牛です。エサは田んぼのあぜや山から収穫した草や木の葉。ウンチは肥料になりました。つまり完全なリサイクル社会であり、「もったいない」が当たり前だったのです。家の前の川にはたくさんの魚がいて、銀色に輝くカワネズミもいました。川には洗い場があり、色んなものを洗いましたが、風呂の水も台所の水も、川には流さず、みんな畑の水まきに使いました。米のとぎ汁だって牛に飲ませていました。「川は1尺(0.3m)流れるときれいになる」と言われていたんですよ。下水道がなかったのではなく、必要がなかったのです。

庭の木にはギンヤンマがたくさん止まっていて、夕方には一斉に羽化したカゲロウで橋の上がすべるほどだったこともあります。大きなクヌギの木にはクワガタやカブトムシ、カナブン、スズメバチ、オオムラサキ、ゴマダラチョウなどいろんな昆虫がいて、みんなで草刈りをしてきれいにした山すそや田んぼ道などには、オミナエシやワレモコウ、リンドウ、センブリ、アキノキリンソウ、ヤクシソウなど、季節ごとに多くの野草が咲きました。クリ林に咲くササユリは学校で図画の時間にスケッチしました。ササユリは能勢町の花で、大切に守り育てている方もおられます。最近では野山でめったに見ることができません。この70年間で、生活スタイルや社会は大きく変化しました。当たり前すぎて気づかなかったのですが、私は「能勢の山はいいなあ」が実感できる中で子ども時代を過ごしていたんですね。

能勢町が「生物多様性日本一の町」として選ばれたのをきっかけに「能勢町の生きもの調査」が計画されました。調査は昆虫、クモ、貝、動物、骨、コウモリ、植物、苔、キノコ、シダなどの専門家が能勢の今の自然を調べてくれたのです。この調査に参加できたのはとても勉強になりました。

能勢の自然はむかしと比べると、見られる生きもの数が減っています。これは人間の暮らしによるものもあるのですが、増えすぎたシカの影響が最も大きいと思います。シカが多すぎて、野山を歩いてもなかなか目当ての植物を見つけることができません。今回の調査で何年かぶりに見つけた貴重なキンランも、1週間後には食いちぎられていました。シカは山だけでなく田んぼや畑にも入ります。シカが食べない植物ばかりが生えている場所も多く、林ではシカが食べない低木が増え、林床の下草もスカスカで遠くまで見渡せてしまいます。こんな林の状態では、いろいろな生きものを守り育てることは難しくそうです。山の土も大雨で流されてしまうでしょう。計算すると今、町内にいるシカは3000~4000頭。その3割を獲ると数が増えないそうです。町内で捕獲されるシカは年間に約1000頭と聞きますが、影響は減っているように感じません。専門家からは10年後が心配との声もあります。

様々な生きものが、影響し合いながら共生している状態=生物多様性です。私は、豊かな自然をシカが変えてしまうのではないかと心配しています。能勢の自然が、シカの好まない植物だけが目に付く「自然」へ、少しずつ変わっているのではないのでしょうか。それでもやっぱり、

「能勢の山はいいなあ」と思っています。

■前田 満先生 プロフィール

子ども時代は前の川で遊んでばかりいた。卒業後は能勢町の小中学校の教員(教育行政も)をしながら、能勢の山野を逍遙する。この間森本式先生をはじめ優れた先達に学ぶことが多かった。退職後は百姓をしながら、能勢の山野を逍遙する日々を過ごしている。



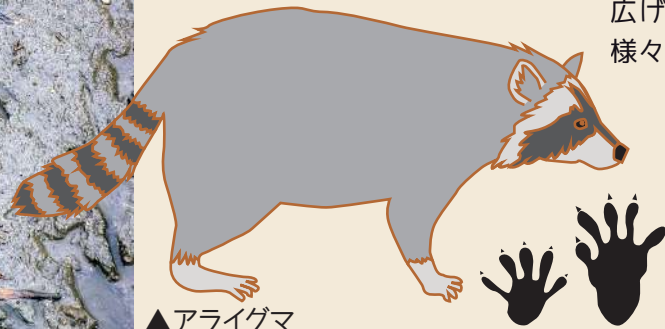


外来種問題とは？

本来そこにいなかった生きもの（外来生物）を人が持ち込んだりして、在来の生きものが追いやられたり、病気を広げたり、農作物をダメにしたりと、様々な問題を起こすことです。



▲アライグマの足あと



▲アライグマ

北アメリカ原産で、飼われていたペットが捨てられたり逃げたりして野生化しています。繁殖力が強く、農作物や他の生きものを食べたり、文化財を傷つける被害もあります。



▲アカミミガメ

北アメリカ原産で、子亀は「ミドリガメ」と呼ばれ、1960年代からペットとして売られました。各地で野生化し、在来のカメ類や他の動植物にも大きな影響があり、2023年6月より「条件付特定外来生物」に指定されます。



◀ヌートリア

南アメリカ原産で、毛皮産業のために飼育されていました。各地で野生化し、水辺に植えられた農作物などに被害がでることがあります。



◀ブルーギル・オオクチバス

北アメリカ原産の魚で、明治時代に持ち込まれ、各地で増えています。在来の生きものを食べたり、他の魚たちが住む場所を奪ったりして生物多様性が損なわれる原因になります。



▲ウシガエル

北アメリカ原産で、1900年代初めに食肉用などの目的で持ち込まれましたが、全国で野生化しました。食欲旺盛で在来の生態系を壊してしまいます。



▲オオカワヂシャ

ヨーロッパ～アジア北部原産の草で、川や水田、湿地などに生えます。高さは0.3～1m。各地で野生化し、在来種と交雑するなど生態系への影響があります。



アメリカザリガニ▶

1927年にアメリカからウシガエルの餌として輸入されたものが逃げ、全国に広がりました。農作物への被害や在来種への影響があり、2023年6月より「条件付特定外来生物」に指定されます。



ムラサキウマゴヤシ▶

別名アルファルファ。中央アジア原産の野草で明治時代に牧草として持ち込まれました。発芽した新芽（スプラウト）がサラダ用に売られています。



▼おわりに 「能勢町の自然を未来に残すために」

この小冊子は、お手に取ってくださったあなたのお役に立てたでしょうか。

生物多様性基礎調査で、能勢町には多くの生きものが暮らしていることがわかりました。しかし、まだまだ情報不足であり、あなたにも新しい発見ができることでしょう。

能勢町生物多様性地域連携保全活動計画（能勢の里山活力創造戦略）には、（仮称）能勢地域自然資源開発センターの設立構想があり、里山資源の保全と活用、その魅力の情報発信、地域住民との連携などを目指すセンターとして位置づけられています。

あなたの自然観察記録が、今後の能勢町の生物多様性を守る取り組みに役立つに違いありません。アメリカの環境活動家であるウェンデル・ベリーの書いた本の中に「地球は先祖から譲り受けたものではない。子孫から借りているものだ」という一節があるそうです。地球を自然と読み替えても良いかと思います。

2015年の国連サミットで採択されたSDGs（持続可能な開発目標）には、生物の多様性や生態系を守ることが挙げられています。

能勢町でもSDGsに取り組んでいますが、人の生活を便利にしながら、豊かな自然を守り続けることは、簡単なことではありません。

能勢町に住む・訪れる一人ひとりが、自然について学び、自然を大切にし、未来の子どもたちに残していくことが求められているのです。

発行：能勢の里山活力創造推進協議会

担当部署（問合先）：能勢町産業建設部地域振興課